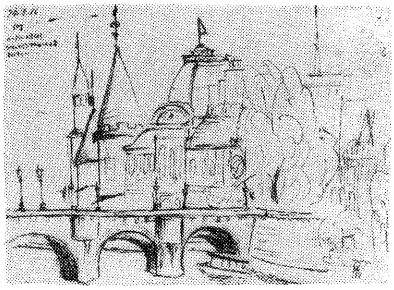
母と娘のヨーロッパ

河井多喜子
祥子
きき手　周郷　博

—スケッチ—

河井祥子



はじめに

周郷　河井さんのお母さんと、祥子さん、お母さんと娘さん二人だけで、ヨーロッパの旅をしてこられて……カメラなんか持って行かないでね。方々でスケッチをして、流行(はや)りの観光とは全く違った旅でしたね。

母　放浪の旅……？

周郷　自分の足で歩いて、言葉も話せない、というハンディキャップ——それを逆に「生かして」、普通の旅行者と違う目で、ソ連から始めて、ヨーロッパ各地の、町の姿、あちらこちらで遊んでいる子どもと、人間と人間、まあ広いいみの人間関係や大人と子どものつくっていく生活というもの、自然と人間のそういうものを見てきたわけね。さすらい、放浪の親子旅で、そういうことを今日はお二人から話してもらいたいと思う。

初めにやっぱり、何処からどういうふうに行った、という道筋を、地図を書くみたいに話してもらって、それから中身に入ってもらいましょうか。

横浜からモスクワへ

母　八月六日の十一時に、横浜を出帆しました。ジェルジンスキー号です。それから船で、三陸、津軽海峡を回り、ナホトカに着きました。ナホトカからハバロフスクまで鉄道、それから飛行機でモスクワまで参りました。

娘　横浜、ナホトカの間が一時間の時差があって、それからハバロフスクからモスクワまでは七時間……戻るわけです。それからまたヨーロッパに入って二時間かな、時差がありました。

母　モスクワに二泊して、赤の広場を見たり……

娘　民族舞踊を見ました。チャイコフ

スキー・コンサートホールで。

母　そしてそこまでご一緒だった方々に見送られて、本当の二人だけの旅が始まったわけです。

娘　朝早く、空港に行き、コペンハーゲンへ向かいました。

周郷　その時、心細いと思った？

娘　前に戻りますけれど、横浜を出る時に、まず私が鼻血を出しちゃったんです。緊張のあまり……

母　私は、彼女がいるから、割合に平気だったんです。いるからだか、もともと平気なたちなのかはわかりませんが。

娘　ところが最初の緊張のわりに、モスクワまでは、日本人はいるし、何となく同じ船の仲間意識みたいなものもあって気持ちも和らいできていたわけです。それが、そのお仲間たちに見送られて空港へ行くタクシーに乗ると、言葉はロシア語でわからないし、全くつんぼになっちゃうわけです。空港に着いても、何が何だかサッパリわからないんです。

周郷　ぼくも去年だけど、心細かったな。ぼくらの乗る飛行機のことなんて、ほとんど放送してくれないの。時間もおくれたし、ぼくは飛行機が行っちまって一人になりそうな気がしました。ちょうど同じ飛行機にのるイギリス人が二人いたもんで、三人で一緒にいましたけれど、そうじゃなきゃとても心細くてね。あなたたちも心細い思いでしたでしょ？……それが旅というものです。

娘　ところが、私たちがついていたのは、全部そういう乗物が時間通りだったんです。（一番最後、台風で船が一日おくれましたけれど、本当にそういう面ではラッキーでした）

でもモスクワの空港で、チケットを持って、そこにすわってろっていわれたんです。ところが見るとどうもそのゲートは開いているんです。それであわてて乗り込みましたけれど、もしそこにいわれた通りにすわっていたらおいて行かれたかもしれないんです。自分たちで気を付けてなければいけないわけですね

周郷　ソ連でもヨーロッパでも、日本みたいにバカ親切にしませんからね。

母　それに、もし何かいってくださっても、ね、あれでしょ？（笑い）

周郷　団体でゾロゾロ行くとね、添乗員がいて、全部一束にして連れて行くでしょ？　それと違って、緊張っていうものが、どうしても旅を意味のあるものにするには必要なのだと思いますよ。

母　何となく、身が引きしまるっていうのか、とてもいいと思いました。

娘　これがやはり、緊張感のない旅だったら、違う印象でしょうね。

周郷　そりゃ、満足感が、これほどないと思いますよ。

コペンハーゲンからロンドンへ

母　それで、まだ途中でしたね。コペンハーゲンで大体半日遊びました。チボリ公園でゆっくり遊んで、鐘の音を聞いたり……

娘　それから、何ていったかしら、イギリスの方へ行く汽車に乗りました。それが向こうの汽車って短かいんですね。たとえば、ハンブルグ行きとか何々行きとかいうのが全部くっついているわけ、一つ間違ったら何処かへ行っちゃったり、終点になっちゃったりなんです。それをさがすのにまた大変！　あっちへ行ったりこっちへ行ったり……

周郷　想像できますね、緊張して。(笑い)

娘　ところがそのさがしあてたのが寝台車なんです。でも、何しろこれに乗らなくちゃ、というんでわからない英語で交渉したわけ、そしたらその車掌のいうには、物凄く高いっていうんです。それでもいいのかって何辺も何辺も聞くもんで、その内に何だか心細くなっちゃって、ひとまずその車を降りて少し前へ行ったら次の車両は普通の一号車、あのコンパートメントのだったんです。それでやっと乗れて……

母　ここからはもうユーレイル・パスが使えるんです。

娘　このパスはとても助かりました。その都度切符を買う必要がないので、目的地についたらまず次に乗る汽車の時間をたしかめておいて行動に移ることにしていました。それからコインロッカーを探し、荷物を置き、お手洗をさがす。それが必要最低限の行動です。

周郷　自分で汽車の切符や、飛行機の切符をとるっていうこと、これは最初、ずい分緊張しましたね。

娘　何しろ汽車が動き出すと、今度は目的地までちゃんと行くかどうかっていうことを確認するまで大変ですね。

周郷　今聞いた話で、この寝台車は高いけどいいのかって何度も聞いたっていいましたね。向こうの駅で切符買う時も、イギリスでね、何時と何時とあるんだけれどこっちの方が安いんだけどどっちがいい？　なんていうの、日本の駅員なんてそんなこといいませんね。高かろうが何だろうが……

娘　私たちもロンドンからパリへ行く時、フランスから先はパスが使えるんですけれど、そこまで使えないのでイギリスで切符を買ったわけね。そしたら、フランスのぎりぎりのところまで買うより、パリまで通して買っちゃった方が安いんですって、それも教えてくれました。

周郷　何か、駅員のお客さんに対する

態度、日本では非常に機械的ですが、違うのね。

母　乗る人の身になるっていうのか。

娘　そう、普通日本だったら顔なんか見ないでどんどん売っちゃうでしょ？　それがちゃんと顔を見て、まず私のことは何歳か？　ってきくわけ。何かと思ったら年齢で安くなるらしくて、それで聞いたらしいんです。私はわからなくて、ボケーッとしてたら、〝パスポートを見せろ〟っていうんです。それで見せたら年齢が書いてあるので結局普通の料金でしたけれども……

そういうことが、とっても親切!!（を感じさせる。）

周郷　だから、親子二人で汽車に乗って緊張してるわけでしょ？　一方では、でも車掌さんや駅員が、ただ事務的じゃないんで、あと味っていうのか、何か喜びが残りますね。ヒューマン・タッチっていうのか、人間的なものがね。二人で冒険をしてるわけだけれど、それは、楽しみでもありますね。

娘　フワッと緊張感が消されて、喜びに変えられるっていう場面が、たくさんありました。

周郷　無表情に口をきいたりしないのね。ちょっとニコッと笑ったりするの。

娘　それも、私たちなんか言葉でいってもわからないと思って、皆が書いてくれるんです。〝いくら〟とか〝どこまで行く〟とか……

周郷　ああ、なるほど！

娘　そういうわけで、オスタンテという船に乗る所まで行って、そこはもうベルギーです。おりて切符を買って、四時間ちょっとでイギリスに渡りました。

母　その船で、すばらしい日本の男性にも出会いました。

娘　家族で向こうへ行ってる方で、親切っていうか、考え方がとてもしっかりしている方でした。

母　イギリス人ていうのを〝初めはあまり好きじゃなかった〟って。でも〝今はとてもイギリス人を尊敬している〟って。

こうしてロンドンにつきました。八月十二日です。

娘　その一週間ぐらい前からやっと夏になったという、bad summer とかいう六十年ぶりぐらいの気候だということでした、そして二日ロンドンにいました。

パリ

娘　それからパリへ向かって、朝早く、まだ店も何もしまっているところへ着きました。

周郷　それは汽車で？

娘　ええそうです。コンパートメントには二人だけで、十時間ぐらいでしょう

か。朝食はフランスパンのかたーいのを食べて……。

母　そして、コンコルド広場、凱旋門、ブローニュの森まで歩きました、二時間ぐらい。

娘　それからオペラ通りを歩いて、午後三時ごろ、オルリー空港の近くのユースホステルへ着きました。

周郷　それは前もって予約かなにか…

娘　いいえ、もう行きあたりばったりです。たまたま船で一緒だった方がユースホステル案内の日本語版を持っていらしてて、それをうつさせていただいたのが役に立ちました。

母　どこへ行っても、二本指を立てて、〝OK？〟それでいいわけ。〝OKね〟なんていっちゃって……（笑い）

周郷　ちょっと話がそれるけど、ユースホステルは千五百円ですか？

娘　宿泊費が千円、朝と夜の食費が五百円、けっこうたっぷり、果物までついて、パンも食べ放題。シーツも持って行ったんですけどいりませんでした。

ところが、スイスとオーストリーは、年齢制限があってスイスは二十五歳未満、オーストリーは三十歳未満でした。オーストリーの場合、母はあてはまらなかったんですけれど、付き添いみたいな顔をしてね。（笑い）

母　でも平気なの。〝親子〟っていうことで、とても優遇していただきましたよ。出入りの度に、行ってらっしゃーい、行って来ますっていう感じ。

周郷　心細さ、緊張感、とまどったわけですね。

娘　そうです。一度にパーッと緊張がとれて、ああいう時の気持ちよさは特別でした。

周郷　日本ではちょっと経験できませんね。

母　そうそ、税関のところでさえ、親子ってわかるとね。

娘　そう。ナホトカの税関が、恐い恐いっていう感じでいたんです。母が先に入ったのに、パスポートは私の方に入っていて、まごまごしていたら、その恐いはずの税関のおばさんが、〝ママ？〟なんていって、〝早く早く〟といって私も一緒に入れてくれたりしてすっかり気分がほぐれちゃった。

日本だったら、こんなに親子っていうのが大事にされるっていうのかしら、そういうことはないと思いますね。どういうのかしら、どこでも〝親子〟っていうことだけで向こうの人がすごく親しくしてくれました。モスクワの人なんてごつくて、愛想がないんですけれど、ホテルのフロントじゃなくて各階にいる人、その人なんかが“daughter？”なんていって話しかけてくれたりして。

母　今でも、あの顔、目にうかびます。私は、親子というより双子のつもりで行ったのに……(笑い)

娘　兄弟よりも、夫婦よりも、親子を大切にしているのかしら。

母　気がおけない、疑いをもたなくていい二人っていうことかしら。それがおばあさん、紳士、若い人、園丁の小父さんでも誰でも話しかけてくるんです。

母　ソ連のホテルで、〃コンニチワ〃なんて、日本にいたことがあるとかいう人に〃オクサマ〃なんて話しかけられましたよ。

スイスへ

娘　さて、パリーからジュネーブへ行きました。夜行列車です。

母　ユースホテル泊と、夜行をチャンポンに使いました。必ず夜行が続かないように。夜行が二日続くとわれわれ、バテちゃうから……。

娘　そうね、ゆうゆう寝られるんだけれど、途中で起こされるから、国境を越えるたびに。

ジュネーブには、やはり朝七時ごろに着きました。ビールをちょっと飲んだところ、真赤になっちゃって、少しよいをさましてから教会をお訪ねしました。そしてそこでホテルを紹介していただきました。そこののおばあさんがとてもいい方で、ほっぺたにキスしていただいたり……。

母　そこに三泊して、そのおばあさんにさよならしたのが二十日でしょ、そして、ベルン、チューリッヒを遊びながら通過して、ザルツブルグに朝早く着いて、夕方にはウィーンに着いて、それからヒュッテルドルフのユースホテルに落ちつきました。

ハムブルグから帰途へ

娘　それから、そこに二泊して、二十四日にハムブルグに着きました。お昼ごろ着いて、二十六日の晩、また夜行でコペンハーゲンへ行きました。

周郷　ハムブルグは知り合いのところへ泊ったわけですね。

娘　はい。二十七日の朝コペンハーゲン着、三時の飛行機でモスクワまで行って、モスクワ二泊、行きの逆のコースを行ったわけです。

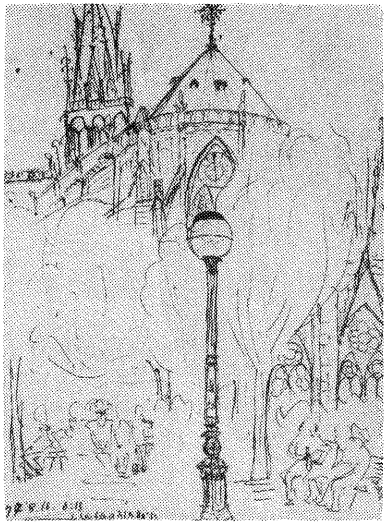
ハバロフスクへ行く時のお月さま、それからモスクワの飛行機から市内への道で見た夕日、これがすばらしくきれいでした。稲むらっていうかしら、そういう所に日が落ち……。

周郷　親子二人旅のコースについては今聞きましたね。今度は、向こうでいったい、何を見て、何を考えたか、それは

点でいいんです。線は終わったから…。

ノートルダム寺院の裏庭で

母　一番印象に残っているのは、ノートルダム寺院の裏の子どもの遊び場の風景です。夕方、寺院の鐘をききながら、私たちもベンチに腰かけて、スケッチでもしましょうかっていうような心境だったんです。たまたま娘の画いているのを見ましたら、子どもを一生懸命画いているんです。白いワンピースの一歳ちょっとぐらいのお嬢ちゃんと、緑色のワンピースの二歳六ヵ月ぐらいのお嬢ちゃんと……それから少しお姉さんみたいな女の子が小さい子を遊ばせているのなんかを見てたわけね。あとは、あなた話してごらんなさい。



ノートルダム寺院の裏庭

娘　そもそもこの旅行に私がどういう気持ちで出たかっていうと、いろいろなことが毎日々々同じことをしていると積って行くし、出て行かないで入ってくるばかりになるような気がしたんです。いいことが入るばかりじゃなくて……。ですから、母は割合に子どもということを考えてみたいようですけれど、私はもう子どものことを全く抜きにして旅行をしてこよう、全部今までのことを、幼稚園のことも何も彼も捨てられたらどんなにいいだろう、かと思って出たんです。

でもいざ行って見ると、やはり子どもは気になるし、大人も子どもも含めた、人間の動きとか、心の動きとかが目に入ってきたわけで、その一つがこのノートルダム寺院の裏の場面なんです。この寺院はやはりステンドグラスもきれいで、何しろヨーロッパで一番きれいな寺院でした。

そのうしろの公園で、ちょうど日が沈む前ぐらいの時間をひと休みしました。そしてスケッチをしていたら子どもたち

が砂場で遊んでいるのが目に入りました。子どもたちははだか、海水パンツ一つで、どうも砂は大理石のくずなのかしら、非常に白くて固まらないらしく頭へかけたり袋に入れたり、そんなことをしていました。あとは穴をほるぐらい。〝遊んでいたスプーンのとりっこでけんかが始まった〟スケッチブックにメモしてあります。何をいってるかわからないんですけれど、もちろん親はつきそって来ているんですけれどのんきにベンチにすわっている。で、そのけんかも始まって、自然に終わってしまった。その内に六時半になってオレンジのパンツをはいている子の母親が帰ろうっていってるらしいんです。ところが子どもは口をとがらせて帰るのがいやだといっている。それでも親はチャッチャッと洋服を着せ、靴をはかせちゃうんです。仕度がすんでしまうと素直に母親と一緒に帰って行きました。

それから、今まで一緒に遊んでいた子どもたちの一人が帰ってしまった後、七、八歳位のお姉さんが一人、幼稚園位の男、女児四人が、公園に置いてあるいすを運んできて、学校ごっこのようなことを始めました。お姉さんがリーダーになって向い合ってすわり、お話をしたり、一緒に歌をうたったりしていました。歌はとても自然に出てくるんです。お姉さん先生の扱いはすばらしい、それ以上に、聞き役の子どもの夢中になって聞いている姿はすばらしいものでした。ちょっとあきてくるとお姉さんが〝あそんでいらっしゃい〟なんていったらしく、パーと散って、追いかけっこをしたり、砂場で遊んできたり、また戻ってくるとそのお姉さん先生は、みんなの体についている砂を払ってあげたりして、またお話等がはじまるんです。この子どもたちの関係は、姉妹だけではないらしくこの場でできた集団のようでした。それを親は全く関係しないんです。それを見て笑うわけではないし、ただあみ物をしたり本を読んだりしてるんです。

母　かといって注目していないわけじゃないのね、心のどこかで見ているっていうのかしら。

娘　そこへ一歳ちょっと、やっと歩ける位の女の子（以下Aとします）が乳母車に赤ちゃんをのせたお父さんと一緒に公園へやってきました。Aは、その砂場での子ども達のようすを見ながらお父さんとの間をいったりきたりしていました。そのうちだんだんお父さんとの距離がはなれ、砂場に近づき、とうとう砂場に入り込んでしまいました。そして一人で砂いじりをして遊びはじめました。今度はAより少し大きい二歳半位の女の子（B）が乳母車にのってやってきて、一人

でポンとおりると、パパーとパンツをぬいで茂みに入り、おしっこをして帰ってきました。そしてすぐに平気で砂場で一緒に遊んでいる。この二人は、前の子どもたちのように皆と遊んでいるのではなく、自分の回りの砂をさわっている程度の遊びをしていました。

もう一人、一人で遊んでいる三歳位の男児がいたんです。そのお母さんは割り合いに子どもにくっついて子どもと遊んでいたんです。ですから当然他の子どもとの関係はあまりないのです。そのお母さんがベンチにちょっと戻ったら、その男の子が他の子に意地悪をしたんです。するとそのお母さんはすぐに飛んできて、自分の子どものおしりをピンピンとたたきました。若いお母さんでした。そのお母さんがベンチに戻ったら、Bのお母さんが〝子どもをそんなにたたいてはいけない〟というようすしていました。言葉はわからないし、聞こえないんですけれど、多分そういうことを言っているらしいのです。しつけの方法はともかく、他のお母さんに注意をすること、またされた方もほんとうに素直にきいていることはすばらしいことだとおもいました。

そのうちにBの乗ってきた乳母車にAが興味を持ったんです。乳母車のところへ走っていって、いろいろさわりだしました。するとBは自分の物をさわられるので、Aをどけようとしているんです。二人がとりっこをしていると、Bのお母さんがおもむろに出てきて、ほとんど何も言わずに、Aちゃんを乳母車にのせ、おもちゃを持たせ、その乳母車を、Bとお母さんが押して歩きだしました。AもBもニコニコで、お母さんはそっと手とはなしてベンチに戻りました。Bはうれしくなってあっちこっち乳母車を押して歩き、Aのお父さんのところまで連れて行ったりしていました。

母　とてもいい夕方でしたね。

迷っているフランスの教育

周郷　今の話聞いてると、ヨーロッパの、伝統的な、しつけはしてるんだけれど、ベタつかないしつけですね。そして徹底してるんだと思います。

だけど、それではいけない、今までのやり方を変えていこうとしています。しかし歴史的、伝統的な方がいいという人もある。ここのとこ、今フランスは迷ってるんです。

おしりをたたいたりすることでしつけをするという伝統を、かえていかなきゃならないんじゃないかって、教育制度の面でもフランスはとても迷ってるんですよ。今、小学校から上の方の教育っていうのは問題があるんです。学校へ入る人

ばかり多くて、先生にも悪い人がいたりして、先進国の悪さですね。しかし幼児教育だけはしっかりしたいものにしていこうという、考えをもっているらしいんです。

娘　ということは、変えていこうっていうことですか？

周郷　そうです。フランスでね、今一番いいことをやってるのは、（上の方は大変化の時代ですけれどね）一番信頼できるのは、幼児教育だっていうことを、去年フランスの奥さんから聞きました。で、そこにまた、問題もあるわけですけれどね。

娘　今の二人だとしたら、どっちが伝統的な？

周郷　おしりをたたく方。

娘　たたく方がそうなんですか?!　私はそうじゃなくて逆かと思ってたんです。

周郷　絶対に子どもは甘やかしません。これはフランスばかりじゃなくてヨーロッパ全体の子どもの育て方です。大人と同じようにうまい物は食わせない、そりゃ子どもはきびしく育てた方が学問をするのにいいという考え方です。

母　もう一人の緑のワンピースのお母さんも、甘やかしているのではなくて、またそこにきびしさはあると思いますよ。

周郷　そりゃそうです。

娘　口でいわないきびしさ、きびしさの意味が違ってくるのね。

周郷　親は親の生活をもってて、何か子どもの方にいいよっていく、ということがないんですよ。じゃ、ほってるかっていうとちゃんとしつけてる。

母　ちゃんとしてますね。態度で…。小さい人に親切にしてあげるとか……。

周郷　ぼくも四年前、ノートルダムから裏町へ行った時、子どもがすずめにパンくずをやっているところを見ました。そしたら三つぐらいの子がはだしではってすずめごっこをやってたの。そこへお母さんがでてきたと思ったら、パンパンておしりをたたいたの、まるでうさぎをつるすようにして……。

小さい時は、ともかく、公共の場でも家庭でも、我慢させるんです。退屈なことにも、親がすぐ退屈をまぎらせるようとをしないの。退屈な勉強でもちゃんとしなきゃいけない、という実にしっかりした伝統なの。小さい時に、小さければ小さいほどキチンとやらせて、親は親で生活をもっているんです。

娘　ハムブルクで特殊学校を見た時に、そこのの先生のお子さんが、食べるものなんかでも、暖かいスープなんか食べたことがないっていうように質素なんです。全くぜいたくをしないで、それか

らちゃんとした家庭だったら、ドイツの人は子どもには黒パンしか食べさせない。それは、歯にいいっていうことと、ぜいたくをしないという意味があるんです。

母　そういうところの教育者も信念があります。自分の子どもはほっておいても自然に育っていく。でもこの特殊学校の子たちは手を加えなければならない子たちだからって。本当にその仕事に打込んでいらっしゃるんです。

周郷　日本の方は、大人が信念がないもんだから、子どもの方にすりよっていっちゃう。何か、子どものことばっかり目についちゃうのね。大人がシャンとしてなけりゃ子どもは育たない、当然ですね。

大人の生活を尊重する

娘　私の見たヨーロッパの、昔のきびしい（おしりをぶつとかぶたないじゃなくて）育て方、わがままま勝手は絶対できないですね。子どもですから、よその家へ行ったり外に出ればいやしく物を食べたり、そういうことはあるみたいですけど。

周郷　多少あるだろうけど、五、六歳ごろまでに、チャンと隣人に対する礼儀なんかができていますね。去年ウィーンの辻さんの家に行った時、辻さんの子どもの友だちでビョルンていう子がいるんです。その子が遊びに来てて、かなり広い家なんですけれど、ぼくのところへちゃんとあいさつにくるの。そしてぼくらがご飯を食べたりなんかしてる間、遊んでて、八時ごろかな、寝る合図でテレビでしずーかな音楽があるんです。日本では聞かれないような……。

そしたら、そのビョルンていう子ももう帰ったろうと思ってたら、ちゃんとぼくの所へあいさつに来ました。そういうふうにちゃんとしつけられていて、八時になったら寝て、大人に大人の生活をさせる、大人の生活を子どもも尊重してるんです。

幼稚園なんかでも、先生は庭で遊ぶ時はとても一生懸命、お座なりじゃなくやっています。でも部屋の中に入ると、日本の先生にくらべると、ちょっと親切でないみたいな、ちょっと距離をおいて見てるんです。じゃ手をかけないから幼稚園はきたないかっていうと、キチンとしてきれいなの。卒業した子たちの写真がずーっとならんでたり、あるウィーンの幼稚園では子どもの足、かわいいでしょ？　それに絵具をつけて型をとった、それがおいてあったりしていかにも子どもを一人一人大事にしてるなっていう気がしました。でも口先では全然ベタつかないの、遠くから見てるだけです。

娘　どちらかというと日本なんか、向こうがベタついてくるよりこちらがベタついてるんじゃないかっていう気がしますね。

周郷　本当にそうです。

娘　それに親もそうだし……。

周郷　親なんだから、当然しつけをして、世の中のじゃま物にならないようにうんときびしくしつけをした方がいいんです。人生っていうのは、粘り強さ、辛抱強さが必要なんですから……。大人がき然として生きていることで、子どもはちゃんとしてきます。見ててもきれいなくらいですよ。あんな小さい子が、ちょちょっときてあいさつして、八時にちゃんと帰って行くのですから。

日本の幼稚園

娘　それこそまた幼稚園の話になっちゃいますけれど、幼稚園の先生自体、本当は、子どもが先生によりかかってこなきゃいけないのに、逆に先生の方がよりかかって行っちゃう。

周郷　そうそう。

娘　これがなかったら自分の仕事がなくなっちゃうから……ただ自分の楽しみのために、自分はこういう信念をもってこういうことをやっているとか、自分の行為を正当化するためだけの、そういう職業に変わりつつあるんじゃないかという不安……

周郷　小さい子どもをもっているマイホームにおちこんでいるお母さんもまた、子どもにベタついて、子どもを自分の手段として使っていますね。これじゃ、日本の先はどうなるのかわからないですよ。

何でもないことを、二人は、親子で見て来ましたけどね。やっぱり日本の町の中の親子から家庭を想像するとね。親たちがき然としたものをもたないで、子どもを核にして、子どもを利用して親のかくされた野望をとげようみたいな、すっきりとしないものが考えられますね。

娘　そういうもの、気持ちを、全部とっちゃっても親である、というようなそれが本当の親でしょう？

周郷　そうですよ。

娘　とったところで本当のものを生み出すのには、どうしたらいいかっていうことは、私もわからないけれど……。

ウイーンの森

母　公園なんかで、上っちゃいけないというところへ上らせたり、そういう勝手気ままなことをやらせている、っていうのが日本人みたいですよ。

周郷　向こうの子はやらないですね。

娘　それでいて、自由じゃないかっていうとそうじゃないですね。そこでウィ

ーンの森の話になるんですけれど……。

朝八時ごろウィーンの近く、ヒュッテルドルフにあるユース・ホステルを出発しました。食糧は、前の日とその朝残しておいた少々のパンだけを持って、……三十分ほど歩いて動物園に着きました。そこに門番みたいな小父さんがいて、言葉がわからないんですけれど、いくらですかっていうようなことをいったら（笑い）どうぞっていうようすで、ははあこりゃ無料なんだなって入りました。

母　そう、大体どこでも無料でしたね。

娘　そうしたらそこへ幼稚園から小学校中学校ぐらいまでの一団がやってきました。〝遠足かしら〟なんていいながら私たちは逆の方向へ歩いて行きました。前を、六十ぐらいのおじいさんが二人、リュックをしょって、向こうの民族衣裳みたいな短かいズボンにハイソックスというようなかっこうで歩いていました。ところがそのおじいさんたちが止まったところにいのししがいるんです。リュックの中からパンを出して上げてるんです。私たちも上げたかったのですけど、なけなしのパンでしょ？　でも決心して上げたところが少しのパンなんで見むきもしないんです。たくさん食べるくせがついているもんで、何しろすごい音を立てて食べるんです。

そしてひとことふたこと話してまたそのおじいさんたちについて行きました。

周郷　ドイツ語できなくても？

母　ええ、何ていうのかしら、心が話しちゃうんです。

娘　どんどん森の中へ行くと、朝早かったせいもあって、森はとても深くて、ここの森が本当のウィーンの森だということをあとから聞きました。観光地化したウィーンの森は本当にチャチでした。

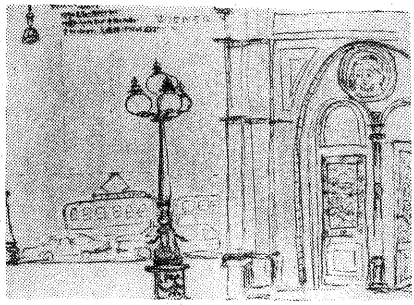
母　ここは直径五キロぐらいあるんです。広い広い森です。

娘　マロニエが多いんですけれど、もう空気が緑色になっちゃうようでした。まっ暗な森の中を、その二人のおじいさんと、あと一組の家族連れにあったきりで、どんどん歩いて行きました。

動物園の入口にはしか、りす、うさぎとか、いろいろな動物がいるように書いてあったんですけれど、いのししにしか会いませんでした。それも全くの放し飼いです。

子どもとの出会い

娘　その内に二人だけになっちゃって、お昼近くなったんです。八時ごろからずっと歩いたわけです。どこの町を歩くのでも、汽車に乗る時間、帰り道の時間を考えて何時まで歩けるか行きとかえりの時間を計算して歩きます。大体いつ



ウィーンの町かどで

もこのことは考えて行動しました。帰りは、同じ道はいやだからと入口の方へ歩てい行ったらひらけたところがあって、そこに、入口で会った子どもたちがいたんです。お花がたくさん咲いていて、棒をもってチャンバラごっこかしら……してました。実に自由！　木に登ったり、上着の袖をダランとさせてマントみたいにして、〝危いですよ〟なんていう人、いないんです。

周郷　こういう場面を考えるとね、日本の子どもだったら遊べないんですよ。

娘　私たちはやはり本当に子どもに会うっていうことが気負いではなく、すっかりうれしくなりました。ずっと見てましたら女の子のグループがいて、そこに男の先生と女の先生がいらっしゃいました。見ると、あやとりをしてるんです。少し近くにいってみると、日本のと同じようだったんです。そして文福茶釜になったらとれない子が多いんです。それを私がひょっととってあげると、みんなびっくりして、もう他人じゃなくなっちゃったんです。言葉なんかいらないんです。〝あらとれたわ〟とかこっちは日本語でいうし、向こうはドイツ語なんですけどけっこう通じるんです。

その内に自然発生で、歌を歌ってくれました。それから〝今テープをとってくるから待って〟なんて全部日本語でいって、録音しました。その歌がとめどもなく出てくるわけ。昔から歌いつがれていて、人が寄ればいつでも歌う歌っていうのがあるんじゃないかしら。

周郷　そしていつも口ずさんでいるから、声の出し方があまり乱暴じゃないのね。きれいな音で歌ったでしょ？

娘　どっちかっていえば音痴なんです。別に上手じゃないの。でも歌を歌いますって力んでいるんじゃないんです。言葉、言葉に節がついているだけ。

周郷　そうなんです。音楽っていうのは言葉なんだな。日本では音楽っていうと特別なものなんです。

母　何か、心をあなたに上げますっていうような……何ともいえないかわいいんです。人種が違うなんてことは問題じゃないんです。人の顔を見て、一生懸命歌ってくれたんです。

娘　そして、先生が帰りましょうって

おっしゃると、最初は帰りたくないとか文句いってるんですけれど、その内にサーッと並んじゃうんです。そういう時になるとパッと並ぶんです。そしたら、一人の子がスッときて、本当に何げなく私に花束をプレゼントしてくれたんです。そしてまた歌が始まって、歌いながら帰って行ったんです。そしてそこにもいのししがいました。本当に、生活、自然が流れているっていう感じでした。

周郷　今の話、聞いてるとね。日本ていうのは、何かロばかりうまいのね。やっぱりいいしつけがしてあるんで、帰ろうっていえばサッと並んで、花束を持ってくる、こういう仕草も全部、やっぱり人間が生きてるかぎりは、生きるということに味わいをつけてくれるものです。そういものが、あるのね。日本はそういうものを全部捨てて言葉だけで間に合わせようとしてる。

母　野の花をつんで、くれる、それもその子どもの言葉ですね。

娘　自分の気持ちを行為であらわす、これは人間がもともともっているんだと思うんです。

ウィーンの子ども

今度はウィーンの町の話になるんですけれど……。小さい子が親から離れていろいろな人のところへ遊びに行っちゃうという場面があったんです。そこが日本だったら、危いですよ、迷惑になりますよって親がついてますね。

母　そう、ヨハン・シュトラウスの像のところね。音楽をききながら。

娘　そういうふうに、自分の気持ちを素直に出すっていうところが小さい時からあるんですね。そしてまた大人もよその子を膝にのせたり、そういう行為をうけ入れてくれるの。

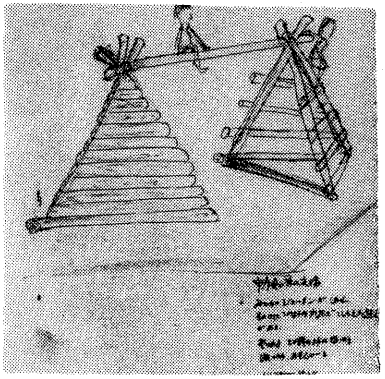
母　皆、知らない人同志がヨチヨチ歩きの子を抱っこしたりお話したり、また他の子がくればその子にもそうする。いわれないで仲よくしているっていう感じですね。

娘　よその子の本をひったくってきて、知らない大人の人の膝にチョコンとのって読んでもらったり、読んでもらえばまた返しに行くんです。そこで、いけませんなんていわないの。返してらっしゃいといったかもしれないけれど、ともかくあせらない。誰とでも口がきけるんです。だから大きくなっても私たち日本人にも平気で話しかけてくるんじゃないかしら。

母　私たちは外国の人に対してそんなに卒直に行動できないですね。けっこう関心はあるのに……。

娘　あるんでしょうね。島国の……。

周郷　閉鎖された、差別感、卑屈な気



持ちがありますね。ヨーロッパはいろんな人種がいるんで差別なんかしてたらおもしろくないんですね。

母　自分で心を閉じたってつまらないし、自分のもっていゝものはこれだけという気持ちであれば、それだけでつきあえばいいのにね。

娘　子どもに関係したことでは、ウィーンのラート・ハウスの前の公園は、子どものために開放されているんです。コンクリートのところに緑色のじゅうたんが敷いてあって、百帖じきぐらいの広さで、そこに木のやぐらのようなのが組んであって、そこで子どもたちが遊んでました。

やはり国のそういうことに対する関心意識というのかしら、とても羨しいと思いました。そして一方はそのやぐらも何もないんです。子どもたちが勝手にボール投げをしても、何をしてもいいんです。日本だったら、たとえば皇居前の広場に、緑のじゅうたんをザーッと敷いて、そういう広い所を自由に利用できるっていうような……コンクリートになっちゃったらこういうじゅうたんを敷くとか、そういう思いつきがすばらしいと思いました。

母　おまけにそのラート・ハウスっていうのは昔の宮殿でしょ？　その前が子どもの広場っていうのがまことにすばらしいと思いました。

それから、ほら、ヒュッテルドルフの……

娘　そうそ、ヒュッテルドルフのユース・ホステルの広い庭へ、近所の子がモルモットを四匹ぐらいつれて遊びに来てたんです。

母　その女の子が、モルモットをだっこをしてかわいがってる、それがまたおもしろいの。

娘　枯葉をたくさん集めて来てはかけて上げたり何だりして……

母　小学校の低学年ぐらいでしょうか。日本だったらそろそろ塾へ行ったりするころですね。でもそれよりこうやって動物をかわいがる心を養った方がどんなにいいか……勉強ばっかりしてどうなるんでしょう。

周郷　教育の基本的なことが抜けてるんだな。

娘　もっと離れていいのね、親と子と。

母　くっつかなきゃならない時に離れててね。

周郷　離れてて、そして目に見えないところで親としてなすべきことを、き然としてやる、日本ではそれをしてないですね。

娘　同じヒュッテルドルフで、夜散歩に出たら、大体どこの家でも、外にベンチを出して、夕食後それぞれが本を読んだり新聞を読んだりの時間をもっているの。もちろん散歩はどこの国でも見られるし、別に子どもに干渉なんかしないで、大人も自分の生活を楽しんでいるっていう感じがしました。

ヒュッテルドルフでは、夜またユースを抜け出してね、昼に行った動物園と反対の方へ行きました。花の咲き乱れる道をふみわけふみわけ小高い山に登ってウィーンの町の灯を見ました。花がいっぱいで歩いていてもふんじゃいそうでかわいそうなくらい。

母　町のすぐそばに、こんなきれいな山があるんです。

出会い

母　汽車で、国際平和ということを勉強している日本の青年に会いました。塩谷さんていいましたっけ、奥さまはスエーデンの方ですって。その奥さまが、日本の教育について、日本では教育、それも最高の教育をうけて、お金持になって、偉くなって、そういうことを目的にしているけれど、私はおかしいと思うっておっしゃいました。そんなことでなく人間と人間が国境を越えて仲よくするためにきたんだっていったら、とても喜んで下さって、がんばって下さいって、割合に上手な日本語ではげまして下さいました。

娘　もう一人、スエーデンの新聞記者という方にも会いました。でも、足が短くて病気なんです。体じゅう傷だらけなんですって、ちょっと見るとかわそうな感じがするですけれど、公害とか、そういう問題を主に取材してるんですって。それで日本人の奥さまなの。これからチェコがどこかへいらっしゃるということでした。

友情

周郷　ま、そういう工合に二人は、向こうで、いろんな人に会って子どもとも遊んで、日本では味わえない友情を味わいました。この友情の中身というのも出てましたね。

娘　その、ベタつかない友情、ですね。

ジュネーブのインターナショナルの小

母さんやら、ピーター小父さんやら……やっぱり友情のひとつですね。何か商売じゃなくて、本当に〝またきて下さい〟っていう感じなんです。そして、その国をとても愛してるの、だから、そこに愛してる私たちにまた来てほしい、そういう感じ。

周郷　そうそうそう。自分の国を愛してますね、自然やなんか。〝私の国を私は大好きだ〟っていう人、日本にはあまりないでしょ、だからそこへきてくれた人に非常に友情を感じるわけなんです。そのスイスのホテルは教会の紹介？

娘　ええ。その教会っていうのが、前の日に大体時間を見たつもりで礼拝に出るつもりで行ったんです。そうしたらどうぞどうぞって中へ入れて下さって、皆がお茶を飲んでるんです。そこでコーヒーをご馳走になって、いつになったら礼拝が始まるのかなって待っている内に皆がバイバイって帰って行っちゃって……（笑い）結局私たちが時間を間違えたということなんです。

母　でも、おいしいコーヒーでしたよ、とっても!!

周郷　やっぱり友情があるとコーヒーの味も違うんですよ。

娘　そう。そこでも初めはよそ者っていう感じで、汗は出てくるし大変だったんですけれど、だんだんと言葉をかけて下さったりしてる内にその親切が、こう身にしみるんです。

母　あんなおいしいコーヒーは初めてでしたわ。

娘　あら、私はあんまり味がしなかったわ。飲んじゃってからあとね、気持ちがほぐれたのは……。（笑い）

母　中に鎌倉へ行ったことがあるという中国の方もいらっしゃいました。

周郷　どうして、日本の人間関係とか友情とかっていうものは、こんなに冷えちゃったんでしょう。ぼく、ヨーロッパのことは、サラッとしていて、いつ思い出しても楽しいという友情が感じられるんです。これはどういうわけだろう。

母　何か、日本の親切っていうとお金とか物とかがからんで行ったり来たりしちゃったり……

周郷　人のつきあいの中に、学歴とかお金とか、うしろにすぐくっついてるんです。

娘　イギリスで日本人の男性に会ったんです。その方はとても親切だしいいお話をたくさんして下さって、最後には電話のかけ方まで教えて下さいました。そしてタクシーにも乗せて下さって、それでもお互いに名も告げずに別れたの。何かそういうことが、日本だったらできない気がします。ありがとうございましたって手紙一本書くわけじゃないけれど

も、私の心の中にはその方の親切が、ずーっと生きているわけです。手紙一本では解決できないことだと思います。

ピーター小父さん

こういう出会いっていうんですか、あっちこっちでありました。ピーター小父さんもそうです。ザルツブルグの公園で植木のせん定をしてた小父さんなんです。

周郷　ピーターっていう名前は何でわかったの？

母　向こうからいってくれたんです。それで〝エブリディ　こういうことをやってる〟っていって、私は〝大変ねー〟なんていっちゃって……（笑い）

娘　それも、こっちから話しかけたわけじゃなくて、向こうから話しかけてきたんです。日本から来たのかとか、東京からきたのかとか。

母　何か、手をとめたなって思ったら、チョコチョコって私たちの方に来て……

周郷　その、お母さんと娘さんの旅行って……羨しいですね。向こうの人にはそれがわかるわけですよ。それも〝言葉〟なんです。口だけじゃないです。人間の関係っていうのは……。

母　親子で、おまけに私たちはきれいなふうをして気取ってなかったから。

娘　それで、〝あら大変ね、きれいに刈れて〟なんていうのは私たち二人で日本語で話してたんです。そしたら話しかけてきたんです。日本語がわかるわけでもないのに。何かこう、通じるんでしょうね。

そして、花を二本折ってくれて……。それから、〝ザルツブルグは、とってもいい町だから、泊らないで行くのは惜しい〟ってしきりにいうんです。でも私たちはウィーンに泊らないとあとのこともあってだめなんだっていうと、〝それなら、また、きっとまたきなさい〟っていうんです。

まとめ

周郷　お金はとっても安く行ってきたんだって？

母　そうなんです。

周郷　それ、ききたいな、最後に。

母　結局、コペンハーゲンまでが三十万ちょっと、往復で。それからそのあとユーレイルパスっていうのが四万円ちょっとです。ですから三十六万円足らずを日本で用意して、向こうはユース・ホステルは安いし、ユースホステル・夜行という形を使いました。

周郷　ホテルだって、パリなんかは安いところ、ありますよ。

フレムデン・チンメル（ペンション）

……なんていうの、自炊できるの、方々にありますよ。部屋貸し。

娘　途中で出会った日本の女の方もおっしゃってました。ユース・ホステルより家庭的でいいって……。

そして私たちは、機内食を食べないでとっておいたり、朝のパンを倹約してお昼に食べたり……。でもヨーロッパは資素ですね。変な話ですけれど、トイレの紙、日本みたいに白いのはありませんでした。別に資源はないわけじゃないと思うんですけれど……。パリの人たちが地味な服を着て歩いてるっていうのもそうだし……。

周郷　スイスなんかでもそうですよ。ぜいたくな時計は自分の国の人は買わないの。じゃあ、このへんでまとめましょうか。

母　はい。一番印象の深かったのは、友情と、新鮮な果物と、ウィーンの森、本当に野性味のある果物……。

食物でも資素ですね。極端にいえば、命がつなげればいい、それよりもふん囲気を大切にしていますね。

周郷　果物のことについていえば、日本は果物も全部商品にして、人をだますために店頭においているんです。虫が食ってるような果物がおいしいのであってそういうのを向こうの人は食べてるんです。そして全部、食べちゃうんです。芯まで……、種まで食べちゃうんじゃない？　日本は、もう少し着実な食物が必要です。―そうして着実な生活と教育が。

娘　食物ばかりじゃなくて、結局、ある物を上手に使うということです。子どもだってそうですよ、あるものを育てていけばいいのに……。

（七四・九・二三）

幼児の教育　第七十四巻　第一号

一月号　©　定価二〇〇円

昭和四十九年十二月二十五日印刷
昭和　五十　年　一　月　一　日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行者　津　守　真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

においの強いものを詰めることはよしましょう。汁のでやすいものや、サラダ、くだものなどは別に密封容器に入れます。

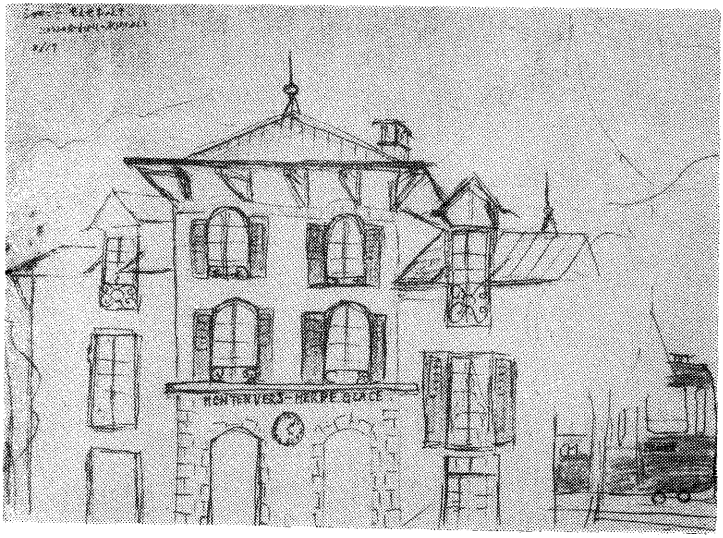
その他幼児はまだ箸さばきも覚つかなく、テーブルにご飯粒をボロボロこぼす年齢です。食べやすくまとめることも大切です。ご飯を小さく握ったり、サンドイッチも中身がバラバラにならないものをはさんで小さく切り、魚は骨や皮をはずして身をほぐすなど細かい心づかいが必要です。

まとめ

幼児のお弁当作りにもいろいろと心を配らなければならないことがたくさんありますが、一応の基準は基準として個人差のあるものですから、子どもの負担にならないように弾力性をもたせたいものです。

最後に献立のことが残りますが、前述のことがらを考慮し、はじめにも記した通り、よいお弁当を作り続ける熱意と努力があれば、お弁当だからといって特別に身構えないでも、毎日の食事作りの中から素直で、よいお弁当の献立が作れるものです。そして、それがまた、その子どもに一番ふさわしいお弁当のはずです。

（女子栄養大学）



母と娘のヨーロッパ　より

スイス　シャモニー

いてこの努力は、言うはやすく行うに難い部類に入ること必定です。どうすればそのメカニズムを明らかにできるか、そのための王道をわたしたちはまだ手中にしていないのです。

そんな無責任な、となじられても、いたし方ありません。これがわたしたちの偽らざる実状なのですから。ただ、最大のポイントは、この後にあります。

8　今後の努力

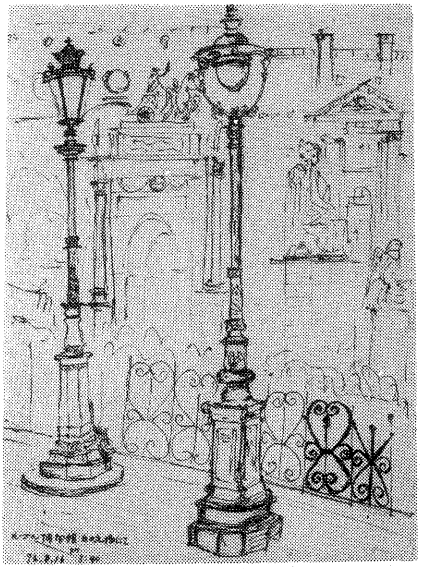
わたしたちはいま、かなりの重みをもった岐路に立っています。最大のポイントと言ったのは、さて、どの道を選び、歩き出すか、に他なりません。

くどくは申しますまい。一方は平坦な道、他方はイバラの道。筆者がどちらを指向しているか、これもくり返しますまい。そしてまた、あなたがどちらの道をとられようとも、邪魔だてなどしますまい。

などと言うのは、きれいごと。じつのところ、あなたがどの道を進まれるのか、とても気になるのです。本音をはけば、イバラの道を歩こうと決心する方が一人でも多くなることを強く望んでいるのです。まだ先のよく見通せない道にお誘いするのに、いささかの負い目を感じるのですが、これが正直なところです。

今回は第一回。「総論」めいたことを述べてきました。お読みいただいたあなたの心のどこかに、何かモヤモヤした、あるいはイライラにも似た、要するにスッキリしない部分がちょっぴりでも生じたとしたら、筆者としては、まずは大成功。次回以降、「各論」的な事がらを扱ってみたい、と考えています。

（三重大学）



母と娘のヨーロッパより　個性的な街燈
（ルーブル博物館前）